氏　　名　岩松文代（いわまつふみよ）
学位の種類　博　士（農　学）
学位記番号　農博第1364号
学位授与の日付　平成15年5月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　農学研究科森林科学専攻
学位論文題目　山村集落の「観光化」に関する研究
——「茅葺きの里」の形成過程を中心に——

論文調査委員　（主査）教授 岩井吉彌　教授 高橋　強　教授 森本幸裕

論文内容の要旨

本論文では，わが国の国土の7割を占める森林に，人間が直接的に関わる場である山村の存在意義と在り方への新たな提言をするために，山村集落が観光的概念である「茅葺きの里」へと変化する過程について，山村住民の意識・行動の実態調査や文献・資料・メディア情報を用いて多角的に実証するとともに，このような山村集落における「観光化」の動きを理論的に考察したものである。

序章では，本論文における「山村集落」と「茅葺きの里」の定義づけを行い，各分野にまたがる山村研究史について，研究対象とされてきた山村の概念と調査内容を体系化した上で現代的な課題を見出し，本論文の意義と枠組みを提示した。

第1章では，山村と茅葺き民家に対する都市住民の意識を次の手法で探った。大衆雑誌の記事や見出しからは，一般の人々は山村を学問用語や行政用語としての概念よりも豊かにとらえていることを読み取った。さらに東北から近畿地方にかけて茅葺き民宿の宿泊者にアンケート調査を実施し，山村と茅葺き民家に対する意識を探り，かつて多くの人々に見捨てられた居住地としての山村は，現代では国民が憧れる暮らしの場，郷愁を感じる場に変化している実態を明らかにした。

第2章では，山村政策，文化政策，林業政策の経緯において，山村振興法下では貧しく遅れた地域という救済対象であったのが，山村の伝統が文化財，地域文化と認識される傾向にあること，また都市と交流する山村の在り方が重視されるようになり，国土全体にとっての山村の役割が強調される傾向にあることを指摘した。

第3章では，わが国の茅葺き屋根の増減動向について，山村を取り巻く社会状況をふまえて四段階の類型化を試みた。まず戦後から高度経済成長期にいたる茅葺き屋根の大規模な減少を「茅葺き屋根の社会減少」とし，さらに，山村住民が希望してもこれまでの居住様式を続けられないといった現在の傾向については，山村人口の自然減少と同様の観点から「茅葺き屋根の自然減少」とした。さらに，今なお茅葺き屋根を維持する世帯を「茅葺き屋根の自然的な維持」の営みとし，建造物群保存地区などにみられる積極的な保存活動を「茅葺き屋根の社会的維持・社会的増加」ととらえ，茅葺き屋根の増減動向は山村問題の現状や，活性化に向けた住民の活動と密接に関わることを明らかにした。

第4章では，高齢化の顕著な京都市左京区久多地区を事例に，全戸訪問アンケートや聞き取りを行い，茅葺き民家の多く残る伝統的な景観への住民意識を探った。当地区の茅葺き屋根は，近年急速に減少しているが，住民は愛着や価値意識を高めており，この背景には①活力が衰退しつつある現在の生活に危機感を持ち，過去の活気ある時代と現在との比較をしていること，②訪問者や他出した次世代の評価（外部評価）を認識していること，の要因が大きいことを明らかにした。

第5章では，茅葺き民家の保存政策に対する住民意識を探るために，重要伝統的建造物群保存地区指定への合意に至った京都美山町北地区と，合意に至らなかった同町下平屋地区，南地区を対象に合意形成過程を比較考察した。その結果，合意形成には指定が集落に大きな利益をもたらし，住民の公平な利益確保が保証されることが影響し，住民の判断規準には，景観保存だけでなく村づくりへの活用の現実性や集落にとって良いことという了解が重要であることを実証した。

第6章では，保存地区指定に至った美山町北地区において，指定に向けた合意形成と観光業の開始を推進した住民リーダ

ーの特徴を調べた。その結果，住民リーダーの属性は，帰郷者，定年退職後の公務員（学校教員）や農協職員，集落社会で発言力を持つ住民であり，集落という小集団内にリーダーが複数存在したことにも大きな意味があることが分かった。さらに，彼らが集落内外の両側面から集落を顧みて，行動できるという性質を持っていることが重要であることを明らかにした。

第7章では，美山町北地区における住民の共同経営による各種観光業の展開と集落組織との関係を分析した。当地区における観光業は，集落組織が再編成されたことによって効果的に進んだが，従来の集落秩序も観光業に対して有効に機能した。このように，集落全体が観光資源であり，観光業が住民の共同経営で行われている場合，観光業は集落社会の秩序と密接に関係することを明らかにした。

結論では，これまでに実証した「茅葺きの里」の形成過程から，1．「茅葺きの里」という観光的な産物の形成論，2．都市との交流による山村住民の意識の外部化，3．景観保存をめぐる山村社会・経済の再編成の論理を導き出した。さらに，山村集落の「観光化」には，都市住民の行動面の表層変化や意識面の深層変化と，山村景観や観光業といった山村の表層変化や，山村の住民意識の深層変化がみられること，そして観光化の動きはこれらの変化が相互に影響する現象であることを論じた。このメカニズムは，山村集落においてみると，山村住民が外部評価の影響を受けて，意識の変化，行動の変化，集落秩序の変化を遂げて新たな生活様式を創り出すこと，つまり，現代における山村文化の再編成であると結論づけた。

論文審査の結果の要旨

本論文は，生活地域である山村集落を観光地としての「茅葺きの里」ととらえる都市的な概念と，これに対する山村住民の反応に着目し，「茅葺きの里」の形成過程を明らかにしたものである。

京都府内の4ヶ所の山村集落や各地方の茅葺き民宿での5年に渡る綿密なフィールド調査，ならびに多様な文献資料を駆使して実態を解明し，山村における観光化の理論的考察を行ったものである。

評価すべき点は以下のとおりである。

1．林業経済学を始めとした政策論的な山村研究では，従来は山村対策の研究が主流であったが，「茅葺きの里」形成の分析によって，これまでの山村研究史からみても際立った山村興隆の動きを検証した。これは山村研究の枠組みの拡大に貢献するものといえる。そして，山村に対する現代人の憧れや郷愁を把握し，山村社会を明るい側面から描き出したことは，魅力ある山村づくりへの政策提言となり，豊かな国土形成に向けて重要な示唆を与える研究といえる。

2．日本の近代化に伴って衰退した伝統的建築様式の民家について，時代を経て現代人の価値観の転換によって文化財や観光資源としての価値が確立する経緯を解明した。そして，茅葺き民家の保存と，住民の合意形成やリーダーの行動など，山村社会との関係を明らかにすることにより，文化財保護や集落景観の保全を支える条件を，山村地域特有の社会的見地から論じる成果となっている。

3．人々の意識変化に注目し，山村に対する都市住民からの外部評価と山村住民の対応の相互作用が茅葺き民家の保存を推し進めた実態を明らかにした上で，この動きが都市山村交流の効果であると指摘した。都市山村交流は，近年とくに重要な政策課題となっているにもかかわらず，これまであいまいに使用されており，その意味を考察した意義は大きい。

4．茅葺き民家の残る景観を活かして観光業を開始し，住民による共同経営を進める集落において，観光業と集落組織との関係を明らかにしたことは，新たな産業としての観光業に対応する社会システムを論じることとなり，様々な活性化活動を展開する山村集落に対して応用できる知見である。

5．現代では，山村を訪問して古い生活を味わうという形の観光が登場し，現代の山村住民が伝統的居住様式の提供に貢献していることを論じている。本論文は，地域文化をめぐるゲストとホストの相互作用を探った点において，とくに国内観光における都会と田舎との関係に着目した観光学の蓄積としての意義がある。

6．さらに，開発に頼らない「観光化」の新たな概念を検討したことは大いに注目できる。山間地にある集落が，日本人の暮らしの形を継承することによって，将来的に存続し続けるための可能性を検討したということは，山村の存続が問われる現代において貴重な成果である。

以上のように，本論文は，茅葺き屋根の民家を有する山村集落が，「観光化」する過程を実証的かつ理論的に分析したものであり，この過程を現代における山村文化の再編成であると論じている。

それは，従来の山村がもつ暗いイメージとは大きく異なり，明るさをもった山村の今後のあり方を提示するものであり，山村政策論，地域計画学，観光学，造園学，社会学，建築学などの発展に寄与するところが大きい。

よって，本論文は博士（農学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお，平成15年４月15日，論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果，博士（農学）の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。